



▲生徒に文化勲章を披露される先生
39・11・30



▲興譲館市民大学講座でご講演
45・10・17

我妻榮記念館 だより

第 13 号

発行日/2008年 8月15日

発行/我妻榮記念館事務局
☎992-0045
米沢市中央3-4-38
TEL・FAX 0238-24-2210

我妻榮の母校講演

館長 伊藤和夫



我妻榮は愛郷の心と報恩の思いが厚い。その思いをいろいろな形で実践しているが、親子二代でお世話になった母校米沢中学校（現米沢興譲館高校）での講演もその一つである。何度も足を運び、我妻榮講演集によれば八回を数える。他に例のない驚異的な回数である。教え育てていただいた母校での講演は大変名誉なことであり、社会で活躍する多くの卒業生の中からその機会を得ることは稀なことである。我妻榮の母校講演はそれを遙かに超えた。日本を代表する民法の権威者たる我妻榮の偉大さであり、母校への報恩の深さがなされたのである。

さて、四回目となる昭和三十九年の講演はこのほか格別なものであった。東京オリンピックに沸き立ったこの年、我妻榮は法律研究の功績により栄えある文化勲章を受章、そのヶ月後に母校の演壇に立った。文化勲章を胸に下げた晴れがましい喜びの姿を生徒たちは食い入るように見つめたのである。温顔に微笑みを湛えやさしく流暢に生徒たちに語りかけた。「この度

の受賞は法学という目立たない学問を、筋にやってきた者にご褒美をくれたこと、縁の下の力持ちにも目を向けてくれたことが嬉しい」と初めに喜びの理由を述べた。そして、若い時分に法律の研究の道に進むと決心したときに、「法律の研究は方法を見せなければならぬ。大変息の長い仕事であるから①長生きをしよう②死ぬまで学問しようという二つの決意をした。」と述べたのである。我妻榮は決意のとおりの生涯を送ったのであるが、その通過点が文化勲章の受章であった。また、「世の中は学者ばかりでは何もならない。お百姓、商人、政治家も必要。銀行や会社で働く人も必要。どの道に進んでも①健康に気をつける②他の仕事に気を使さないで自分の決めた道をしっかりと歩くこと」と生徒たちに熱いエールを送った。社会が発展するには社会全体の層の厚さが大事であり、若い後輩に「それぞれの道で、人前のものを身に付けよ。」と説いた。受章を機に白らの人生を語る講演は生徒たちの心を動かし、大志を鼓舞された者は数知れない。私もこの講演を聴講した生徒の一人である。

回想 日々の我妻榮 ④

我妻榮の別荘

(その二：真鶴)

名誉館長

我妻 堯

榮は昭和十三年(1938年)に真鶴に別荘を建築したが、前号で紹介した軽井沢の学者村とはちがって、何故真鶴を選んだのか、その正確な敬意は筆者にも判らない。当時榮は、文理科大学(後の教育大、現在の筑波大)の総貫教授と親交があり、教授からご自身の別荘の近くに良い土地があるからと勧められて建てることに決めたのが理由かも知れない。東海道線の真鶴駅から徒歩で二十分かかるから榮の足ではタクシーを利用する必要があった。既に述べたように榮は左脚が悪かったが、関節の病には温泉が良いと言われていた時代に近くに湯河原や熱海という有名な温泉町があるのにあえてこの地を選んだのは恐らく当時の医学で「関節炎は炎症だから温めるのは良くない」といわれていた為であろう。土地は小高くなっており、庭の正面から相模湾を一望に見晴らすこ

とが出来る非常に眺めの良い場所である。晴れた日には近くの初島は勿論、大島から新島・利島まで見ることが出来る。恐らくはこの眺めに惚れ込んで別荘を建てる気になったのであろう。家族は「真鶴の別荘」と呼んでいたが正確には吉浜町で崖を下って海岸に降りると福浦という小さな漁港がある。西に向かつて吉浜海岸が広がっており遠浅の海水浴場だったが現在ではサーフィンが盛んである。戦前は周囲の集落が未開発で、海岸の岩に付着している海藻を採取して乾燥させたものを岩海苔と呼ばび、軽く火であぶってご飯にかけて食べるのが土地のご馳走であった。近所には店も少なく魚屋が漁港で採れた新鮮な魚、冬は「ぶり」などを売りに来た。「伊豆の山が雪で白くなるとぶりが捕れるのだ」というのが筆者が幼い頃に聞いた父の口癖であった。

冬の晴れた日は非常に暖かく南側の縁側は日当たりが良く、榮の好きな日光浴にも最適であった。土地の一部はミカン畑だったので数本の樹が残っており、子どもの頃はミカンをもいで食べるのが楽しみであった。榮は夏は軽井沢で、冬から春にかけ

ては真鶴で原稿を書いたり、お弟子さんと研究会を開くのを習慣としていた。後には祖父の又次郎(白雷さま)の隠居所としても利用され、祖父はこの地で昭和十八年六月に逝去した。その後、昭和三十七年、四十年頃に母が庭の南側に榮専用の二階建ての離れを建築し、そこで原稿を執筆するようになった。昭和

四十八年十月十八日に東京から到着した際に、発熱と上腹部痛を訴え、二十日に国立熱海病院(当時)に入院、胆嚢炎の診断で治療を受けたが疲労が溜まって衰弱していた為か翌二十一日に炎症によるショックで急逝した。別荘の書斎の机には書きかけの原稿が遺されていた。

注1：現在、この土地には「ラ・シエネガ」というホテルが建築され、海の見晴らし・南欧風の建物とフランス料理を売り物にしている。インターネットにホームページが掲載されている。

注2：前回述べた軽井沢の別荘は現存しておりインターネットで「軽井沢↓ナショナルトラスト↓我妻榮の別荘」と引くと見ることが出来る。
http://www.kanetsawano-jpmanhara.com



1954年 真鶴にて ▼▶



来館者の
コトバ

○平成二十年六月

司法試験を勉強している者ですが、偉大な我妻先生の生家があるとの事で訪ねました。亡くなってもう三十年以上経つものと思いますが、今なお民法の通説あるということに、とても偉大な方であると感じます。法律の勉強は思った以上に難しく大変ですが、頑張りたいと思います。

名護

○平成二十年七月

新第六十一期司法修習生で参りました。

偶然にも山形に配属されましたが、偉大なる我妻先生の生家に来ることができて、とてもうれしかったです。

これからも、困難なことが多くあると思いますが、私も初心を忘れず頑張っていきたいと思っております。

澤田

米沢興讓館高等学校

我妻先生の足跡を訪ねて

運営委員 五十嵐 京子
下さっているようでした。

前日の雨も上がり、いよいよ緑の濃さも増した七月八日、梅津事務局長と共に、県立米沢興讓館高校を訪問しました。興讓館は、我妻先生の母校、そして父君が教鞭をとられたところであり、母校と後輩に対する先生の熱い思いは夙に知られているところではありますが、あらためて先生の足跡をたどろうと、先生とのつながりが深い学校を訪ねました。期末試験終了翌日、何かとお忙しい中でありましたが、蒲生直樹校長、山口道夫教頭の両先生をはじめ担当の先生方には快く対応していただきました。

校長室にて

まず壁面に掲げられた四名の大先輩の方々の写真に迎えられます。文化勲章受章の我妻榮先生を中にして伊東忠太（文化勲章・建築学者）、高橋里美（文化功労賞・哲学者・元東北大学長）浜田広介（児童文学者・校歌作詞者）の各先生方です。今年で創立百二十二年、藩校から数えて二百三十二年という歴史と伝統に輝く興讓館、時代や校名、校舎が変わっても、いつも母校を温かく見守り、励まし続けて



図書館にて

入館すると目の前に、我妻先生の胸像が立っておられます。この胸像は、昭和四十八年九月、同窓会有志の方々よりご寄贈いただいたもので、校舎移転に伴い、関東町の狭い旧校舎図書室から笹野の広い新図書館へと移動してきました。

すぐそばの大きな書棚が目を引きまします。「白頼文庫」です。我妻先生は、文化勲章ご受章を機に、興讓館のために昭和四十

一年、白頼奨学財団を設立されました。この財団は、奨学金給付を柱に、図書寄贈がその主な事業であり、詳しくは「我妻榮記念館だより第十号」に掲載。生徒たちは今もなお、奨学制度とともに、「白頼文庫」への図書寄贈という恩恵を受けているのです。図書数は現在まで千六百冊を超え、毎年購入にあたっては、値が張り普段購入できないもの、郷土出版物、新聞縮刷版等を中心に選定しているというのでした。高校在学時代はもとより、卒業してからもじっくりと読みたい、参考本としたと思うような書物ばかりでした。だいぶ多くの手垢がついた一冊を手にし、裏表紙の貸し出しカードを見ますと、なつかしい生徒たちの名前が記入され、感慨ひとしおでした。



資料室にて

平成十二年、藩学創設三百年を記念して建てられた立派な講堂の一角に、空調設備の整った資料室があり、興讓館の長い歴史を物語る貴重な資料や品々が整然と展示されています。そのなかに、我妻先生のコーナーがあり、掲額された肖像写真の前には、先生の揮毫による色紙、「守一無二無三」（一を守り、二無く、三無し）とともに、幾度も推敲を重ねられた分厚い生原稿が展示されています。因みに、我妻先生と並んですぐ隣は、先生の中学（現在の興讓館）時代の同期生、友人の浜田広介氏のコーナーです。生徒たちは入学して間もなく、「興讓館学」の一環として、この資料室で学校の歴史や大先輩について学ぶのです。普段は厳重大切に保管

管理されていますが、講堂で諸行事が実施される際には、生徒・保護者等に公開され、自由に見学も可能ということです。

中央廊下にて

最後に、生徒たちが最も多く通る中央廊下を紹介しますと、ここにも代表的な卒業生の方々のコーナーがあります。両側のガラス戸棚には、写真や色紙、著書などの資料が展示され、浜田広介氏の向かい側で我妻先生が微笑んでおられます。生徒たちが日常的に大先輩に触れる場となっているのです。

おわりに

校長室でいただいた『平成二十年度 学校案内』にもありましたが、興讓館高校教育の柱として「興讓」の精神
① 白他の生命を尊重する精神
② 己を磨き誠を尽くす精神
に「尽くす精神」を現在も継承しておられるということですが、まさに我妻先生は、その精神を具現化なされた大先輩として母校で敬われ、大切にされていると感じ入りました。
郷土や母校をこよなく愛し、後輩に大きな期待と情熱を寄せられた我妻先生が他界なされて三十年有余、そのご遺徳は母校興讓館のいたるところに偲はれ、先生の御心は今もなお生きていることを実感し、嬉しさと爽やかな気持ちに満たされ帰途についた次第です。



我妻榮児童文化賞

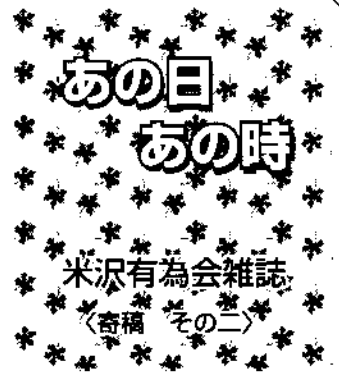
第15回我妻榮児童文化賞の表彰状が、去る2月23日(土)ホテルサンルート米沢で行われました。
 表彰式では、安部三十郎市長をはじめ多くのご来賓の方々が見えられ、付き添いの先生や保護者の見守る中、児童文化協会の高森務会長(100歳)から賞状と記念品が授与されました。

米沢児童文化賞



南齋さんは、小学1年生の時
 からいろいろなボスターコンク
 ールで、県の最優秀賞などを受
 賞したり、その他に読書感想画
 コンクールなどにも積極的に応
 募し、その都度素晴らしい成績
 を残してこられました。
 今回そうした日常のたゆみな
 い努力が素晴らしい賞につなが
 ったものだと思います。本当に
 おめでとうございます。

本年の我妻榮児童文化賞
 に輝いた方は、米沢市立第
 一中学校3年生の南齋未緒
 さんです。南齋さんは、財
 団法人8020推進財団の
 主催する「8020運動ボ
 スターコンクール」におい
 て全国最優秀に輝いた功績
 が高く評価されての受賞と
 なりました。8020運動
 とは、日本南科医師会が提
 唱する「80歳になっても自
 分の歯を20本以上保とう」
 という国民運動です。



自由か平等か

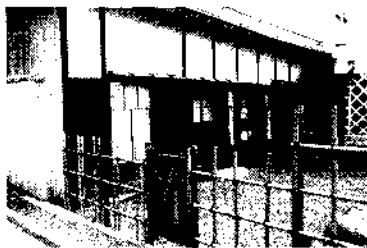
我妻 榮

ルイ十四世が「朕は國家也」と
 云つたと云ふ事は中世の國王を示
 す好標本として有名な句であるが
 全く當時にあつては國王の權力は
 絶対無制限、人民は理も非もなく
 唯命之従ふを天分として苛斂誅求
 も争ふに由なく、貴族僧侶と生れ
 ざる悲は奇才を抱くも伸ぶるに術
 なく、總てを運命と諦めて泣き寝
 入るより他に仕様がなかつた。苟
 んや人民の權利など、云ふものは
 夢にも考へられなかつたのである。
 然るにルッソー一度出で、自由平
 等を叫び、モンテスキュー一度立
 て國會政治を説くや多年抑壓せら
 れた國民の個性は猛烈な勢を以て
 覺醒し、社會思潮は茲に全くその
 色彩を一變するに至た。即ち一面
 に於ては「各人は生れ落つるや絶
 對的に平等である、法律の前には
 王なく、貴族なく、僧侶ある事な
 し、只總てが社會を形成する平等
 なる一分子に過ぎない、従て人民
 を命令する權利は此社會全體の合
 意による權力より他に在る事なし」と
 唱へられ、又一面に於ては「人

は生れ乍らにして天賦の自由を有
 する、この自由こそ國王の命令も
 法律の力も決して侵す事の出来な
 いものである。此自由を尊重する
 範圍に於てのみ命令も法律も力を
 有する」と考へられたのである。
 而してこの天賦の自由論、人民平
 等論は十九世紀の一大潮流として
 あらゆる方面に表れた。國會を開
 いて人民の選出した代議士の同意
 を得なければ法律を制定する事の
 出来なくなつたのも其一である。
 今まででは重々不屈不得千萬など、
 云ふ理由の下にお上の力を以てど
 し、裁断せられたものが「何人
 と雖法律に依るに非んば逮捕、監
 禁、審問、處罰せらるゝ事なし」と
 と厳然たる障壁を設けて人權の守
 りを固めたのもこの思想の結果であ
 る。貴族僧侶と雖納税を免れ得な
 い、兵役は總ての者に平等也と云
 はれたのも亦夫れである。

垣根の設置

記念館の西側に、扉付きの四
 つ目垣根と、東側にウコギ垣を
 新たに設置しまし
 た。記念
 館の建物
 にふさわ
 しいみこ
 とな景観
 になりました。ぜ
 ひ、ごら
 んでくださ
 い。



記念館のスタッフ

よろしくお願ひいたします。

- 名譽館長 我妻 良 亮
 - 顧問 松野 寅 光
 - 顧問 小関 久 夫
 - 顧問 今山 保 夫
 - 顧問 伊藤 幸 夫
 - 館長 梅津 秀 保
 - 事務局長 小林 拓 敏
 - 管理人 小藤 英 敏
 - 運営委員 遠藤 敏 彦
 - 運営委員 安部 英 彦
 - 運営委員 佐藤 京 子
 - 運営委員 五十嵐 節 子
 - 運営委員 高橋 和 彦
 - 運営委員 本多 和 彦
- (運営委員は、二十一年度)

開館日のご案内

金曜日、日曜日、月曜日を閉
 館日とします。
 開館時間帯は
 金曜日、日曜日が午後1時から
 4時まで、月曜日が午前10
 時から午後4時までです。
 その他の曜日に希望の場合は、
 開館日にご連絡ください。出来
 るだけご要望に応じるようにし
 ております。

入館料 無料

